

共同運営部門：リハビリテーションセンター

—関係部署—

役 職	スタッフ名
センター長兼外傷機能外科部長	小野 秀文
技術科長代理(理学療法士)	石田 恭子
技術科長代理(理学療法士)	津野 光昭
主幹(理学療法士)	大野 直紀
主査(作業療法士)	安江 優美
主査(言語聴覚士)	一柳 律子

—概要—

リハビリテーション科では医師1名、理学療法士23名、作業療法士10名、言語聴覚士4名、事務員2名を配し、急性期の患者を中心にリハビリテーションを実施している。

リハビリテーション科の診療基準は、運動器リハⅠ、脳血管リハⅠ、心大血管Ⅰ、呼吸器リハⅠ、廃用リハⅠ、がんリハⅠの施設基準を取得している。また土日、祝日の運用も行っており周術期の患者に対し、継続的なリハビリテーションの提供を行っている。

【理学療法部門】

理学療法部門では、各診療科において急性期の患者を中心に入院直後より積極的な介入を行っている。入院患者以外にも外来の心臓リハビリテーションを毎日実施すると共に患者の個々の運動能力に応じた運動処方を行えるよう心肺運動負荷試験(CPX)の実施も行っている。また院内の活動では、呼吸サポートチーム、緩和ケアチーム、糖尿病教室や生活習慣病教室への参加を積極的に行っている。

【作業療法部門】

作業療法部門では、脳疾患部門、整形部門、集中治療部門の患者に対し、日常生活動作の改善や周術期のせん妄の改善を目標にリハビリテーションを施行している。それと共に日常生活動作の方法を安全に施行する為のパフレットの作成や福祉用具の紹介、提供も行っている。また院内の活動では認知症サポートセンターへの参加を行い認知症患者への介入もおこなっている。

【言語聴覚部門】

言語聴覚部門では、脳血管障害の患者を中心に嚥下障害、高次脳機能障害、失語症へのリハビリテーションを実施している。院内の活動では、病棟看護師と協力し摂食嚥下療法にも取り組むと共に、病棟スタッフに対し摂食嚥下の研修も行っている。

—実績—

(表1)2019年度リハビリテーション科実績

	新患者(延べ人数)	実施単位数
理学療法部門	49,340名	78,264単位
作業療法部門	21,969名	35,153単位
言語聴覚部門	6,297名	8,857単位
心臓リハ外来	878名	2,634単位
入院サポートセンター	605名	

今年度は、作業療法、言語聴覚部門において昨年度より実施単位数が減少した。各診療科からの依頼として救命診療科・救急科の依頼が多く全体の約40%前後を占めている。また心臓リハ外来では定員を6名に増加し運用を行ったことで新患者、実施単位数ともに昨年度より増加した。2019年度より入院サポートセンターでは、入院決定の患者(整形外科、外科を対象)に対し運動指導、運動機能評価を行うことで入院までの廃用予防に努めている。

—今年度の成果と反省点—

今年度は、業務の効率化を目標に臨床業務を実施した。特に救急科の患者に対し、医師(リハ医)が事前に評価を行い介入時期の検討を行うことで適切な介入時期、介入時間を図ることができた。理学療法部門では、救命診療科における人材の育成を目標に挙げ教育を行ってきた。それにより救命領域に対応したセラピストの拡充を図ることができた。作業療法部門では、昨年度と同様に認知症ケアセンターへの参加を積極的に行うと共に泉佐野市での認知症事業にも職員を派遣することで行政との密接な関わりを構築することが出来た。言語聴覚部門では、昨年引き続き、病棟と協力を行い、摂食嚥下療法を施行した。また摂食嚥下チームの立ち上げに向けワーキンググループの立ち上げに向け活動を行った。

—来年度への抱負—

理学療法部門では、引き続き周術期の患者に対し質の高いリハビリテーションを提供していく。特に脳血管領域のリハビリ実施時間を増加させより密なものにしていく。作業療法部門では患者の「セルフケア」に着目し患者のADLの改善に直結したリハビリテーションを適用していく。言語聴覚部門では、院内にて摂食嚥下チームの立ち上げを行い各病棟と共同し、統一された手法で患者への介入を行っていきたいと考える。